

部屋～ シューベルト：即興曲 D899-1 (op. 90-1) ハ長調

現代人にとっての「部屋」とは何だろう。

一人一部屋を占有するのは当たり前。それどころか、満員電車の中にあつてさえ、あるいは、街を歩いているときでさえ、デジタルプレーヤーの音楽を聞きながら、個室状態にいる。子供から大人まで、一人で夢中になってデジタルゲームに興じる。インターネットは個室と個室を繋ぐための便利な道具になっている。かつては大衆娯楽と呼ばれたテレビは多チャンネル化して、個人が自由に番組を選ぶことができる。携帯電話は、持ち歩きに便利な個室空間であつて、テレビを見ることも、音楽を聴くことも、情報検索もできる。マスメディアは次々と崩壊し、大衆というものは消えつつある。車社会は、一人個室に居ながらにして遠くへ出かけることを可能にした。

全ては個人が自由に個室空間を楽しむために作られている。もはや「部屋」とは3次元的な空間を意味していない。

それだけではない。

現代において「部屋」とは独善的になれる空間、となつているのである。上記のような個室空間はそれを助けている。

我々は自由な選択をすることができるはずだが、独善的な選択に走っている。これはもはや選択とは言えない。偏見に基づく選別、とでも呼べばよいだろうか……。現代詩は、よく「自己満足」の集団によって歪められているというようなことを言われる。ある意味では、個室的な空間に閉じこもっていることを意味しているのであろう。

こうして考えてみると、戦後、我々は独善的な「気分」になれる自由を勝ち取ったに過ぎないのであつて、決して一人の自由な人間存在を勝ち取ったのではない、と思えてならない。

部屋、とはそもそも何であろう。部屋というものの持つ意味とは何であろう。

我々は社会的存在であるとともに、一人の自由な存在である。部屋とは、その自由を一人噛みしめる空間ではないか――。

この曲は、わずかな振幅の中で揺れ動くころのような、あるいはさざ波のような、かつ、ひっそりとした個人的な雰囲気を持っている。誰に聞かせるでもなく、ただひとり部屋にいて弾く――そんな曲である。もし、自らを癒すことのできる涙があるとすれば、

それはこの曲のような温もりを持っているだろう。

ベートーヴェンの作品のように、ある時はモニュメントとして偶像のように祭り上げられ、ある時は歴史によって徹底的に歪められたりするようなものではない。そういうものとは無関係ではないにせよ、決定的に違う空間がある。両者がほぼ同時代のものであることが信じ難いほどだ。